

SHOOTING EYE

シューティング・アイ

Express

ONFILM

HIROSHI MACHIDA, JSC



Photography © Photo.Kunst-Atelier ARIGA

ファインダーを覗いているっていうのは、誰よりも先に役者さんの芝居をちゃんと見られるということ。役者さんの生の感情がファインダーから伝わってきて、僕にとってはこんな幸せなことはないですね。

映像は、まず役者さんの気持ちを伝えるためにどうすべきかを考えて作っていかねばならなくて、構図を含め、ライティング、美術、そういうものをすべて含めてトータルでコーディネートするのがカメラマンだと思っています。

今はカメラもたくさんの種類があって、勉強もすることもたくさんありますが、僕らの基本はとにかく「ものを写す」ということです。本編なら、どうやったら監督の思い通りの画を撮れるのか、CMなら、どう撮れば商品を美しく見せられるのか。どんなに機材が新しくなっても、やっぱり「写す」という行為の原点に立ってないといけないと思うんです。

町田 博 (JSC) 撮影監督

多摩芸術学園卒業後、'77年東北新社入社。トヨタ自動車、P&G、パナソニックなど多くのTVCMを撮影。サントリー『燃焼系アミノ式』（'03年）、日本コカ・コーラ/ファンタ『そうだったらいいのにな』（'05年）がACCグランプリを受賞。'05年3月より株式会社ティーエフシープラスの代表取締役社長を務める。劇映画では、石井克人監督の『鮫肌男と桃尻女』、『PARTY7』、『山のあなた 徳市の恋』をはじめ、『風花』（相米慎二監督）、『雪に願うこと』（根岸吉太郎監督）など多数。

Q. 映画制作に関心を持ったきっかけを教えてください。

A. 映画館に通うようになったのは高校の頃からです。僕の育った福岡は名画座がいくつもありまして、日本のヌーベルバーグの大島渚監督とか篠田正浩監督とか、あとイタリア映画のフェリーニ、アントニオーニとかを見ていました。高校を卒業後は普通の大学に進学しようと思っていたんです。が、1年浪人して、その間も映画ばかり見ていて、じゃあ映画の学校に行こうかと、多摩芸術学園という3年制の専門学校に進学しました。親は国家公務員で厳格な家庭でしたので大反対（笑）だいたい厳格な家庭の子はグレルっていう（笑）そういう感じです。

Q. 撮影監督になったきっかけは？どなたに師事されましたか？

A. 映画が好きで、どんな仕事でも携われれば良いなと思っていて。「監督は物凄く頭が良くないとダメかな…撮影だったら、まあ…」という感じで（笑）特に写真が好き、というかむしろ嫌いな方でした（笑）

撮影自体は専門学校で16mmを経験していましたが、35mmは卒業後'77年に東北新社に入社してから扱いを覚えました。東北新社では何人かのカメラマンに師事しましたが、最終的には河崎敏Cの元でカメラマンになりました。河崎さんは、ボケ味とかをととても大切にされる大変優秀なカメラマンで、望遠系のレンズの使い方や、それと対照的にコカ・コーラのCMとかで使われていたワイドレンズの使い方など凄く学ばせて頂きました。

Q. 他に影響を受けた撮影監督はいらっしゃいますか？

A. 好きな撮影監督としては宮川一夫さん、森田富士郎さん、成島東一郎さんでしょうか。

宮川さんはカメラワーク。成島さんは色の使い方が凄く上手です。あと、篠田正浩監督の作品を撮影されていたのもあって好きでした。森田さんは、「人間の視覚はレンズに例えると40mmくらい。40mmレンズ1本作品を通せたら凄い、ロケセットの時とかは押入れの壁を壊してでも40mmで撮りなさい。」みたいな記事を読んで、「あ、そうなんだ」と思って1回だけやってみましたけど全然ダメでした（笑）

Q. 本編の仕事をされるようになったきっかけを教えてください。

A. 最初の本編は川島透監督の『江戸川乱歩劇場 押繪と旅する男』でした。元々、川島監督はずっとハウス食品のパーモントカレーというCMをやられていて、河崎Cが撮影をされていたんです。ある時、たまたま河崎Cが出来なかった時に僕を指名してくれて。その時に僕を気に入ってくれて「一緒に本編やってみない？」という話になったんです。

Q. 特に相米慎二監督と石井克人監督とのお仕事が印象的ですが、お二人のエピソードを伺えますか？

A. 相米監督と初めて仕事をしたのは、'94年の日産セフィーロのCMでした。撮影の後、「まず飲みに行こう」と誘われて、一晩で7軒くらい行きました（笑）それから親しくなって。相米さんは根っからの映画人で、本当に飲みながら色々教わった感じでした。「映画を見に来る人たちは、監督でもなく、カメラマンでもなく、役者を見に来る。だから役者を如何に芝居させるか、如何に撮影するかというのが大事なことだ」という教えのもとに、一緒にお仕事をやらせてもらいました。相米さんとご一緒していて面白かったのは、監督は大体ワンシーン・ワンカットで行かれる方で、シーンでテストをする時に役者を一番見たいところにご自分でどんどん動かされる。その様子を見ていた時に、相米さんの動く方にカメラも動くといいのかも、と気付いて。監督は絵コンテとか絶対にないんですけど、裏でやっぱり手綱をひかれている自分がいましたね。あと、フレームとか画とかは僕に全部任せてくれるんですけど、気に入らない時はただ「町田、お前それでいいのか？」と仰られる。映画の方なので、どのレンズがついていればどう映っているか分かっておられるので、ご自分では絶対にカメラを覗きません。ただ、「それでいいのか？」って言われるんです（笑）「こうしろ」とは言わない。で、そこから何か考えなければならないという。

石井監督は'91年にTFCに入社されて、僕は監督の初CMを撮影させてもらいました。ハウス食品さんお菓子のCMでした。それから、コマーシャルをメインでずっと一緒にやらせてもらって、その後、石井監督も元々映画を作りたいということだったので『鮫肌男と桃尻女』で一緒に本編をやらせてもらいました。石井監督の場合は、まず自分が映画作りを楽しむというところですね。もちろんお客さんに楽しんでもらうことも大切なん

ですが、まず自分が楽しむという。また、石井監督はとにかく全部絵コンテにしてきますので、みな台本というよりは絵コンテを見ながら撮影に臨むという感じ。石井監督の描いた絵をいかに忠実に映像にするかというのがメインになります。絵に大変力がある方ですので、それを映像にするのはそれなりに苦勞があります。「この漫画のような絵をどう映像にするのか」という。特に『鮫肌〜』は苦勞しました。

Q. 作品のルックはどのように決められますか？

A. CMの場合は商品というものがあって、監督もスタッフもいかにしたらその商品が売れるかということを考えます。監督の考えにプラスして、代理店・クライアントさんの考えをもとに作っていくという。撮影に関しても、CMは商品をちゃんときれいに見せることが前提です。映画の場合、監督というのがトップにいて、その監督のためにみんな何が出来るかということになります。また、映画は人をどう撮るかという事だと思えます。

Q. 例えばデジタルカメラなどの新しい技術により、ご自身の仕事が変わりましたか？

A. カメラも、レンズも、フィルムも進化していますが、僕らは勉強していくのが日々大切なことだと思います。フィルムもカメラも出たら試してみて、実際に現場で使って良さを知ることが大事です。フィルムも昔は感度が100じゃないと色んな意味で厳しかったのが、最近は500でも粒状性とか出るようになって、助手の頃とかは100で育った人間なので、照明とかもたくさんたいて汗だくだったんですけど、最近は高感度でライトとか本当に減りましたし、色々楽になったと思います。それでも、新しいフィルムや機材を使いこなせるかは、カメラマンの技量によるところになると思います。

Q. 映像業界を知らない人に「撮影監督」という職業を説明するとしたら？

A. 映像は、まず役者さんの気持ちを伝えるためにどうすべきかを考えて作っていかなければならなくて、構図を含め、ライティング、美術、そういうものをすべて含めてトータルでコーディネートするのがカメラマンだと思っています。

Q. 撮影監督という仕事の最も好きな部分は？

A. ファインダーを覗いているっていうのは、誰よりも先に役者さんの芝居をちゃんと見られるということ。役者さんの生の感情がファインダーから伝わってきて、僕にとってはこんな幸せなことはないですね。

Q. 撮影を目指している若い方々にアドバイスを頂けますか？

A. 今はカメラもたくさん種類があって、勉強もすることもたくさんありますけど、僕らの基本はとにかく「ものを写す」ということです。本編なら、どうやったら監督の思い通りの画を撮れるのか、CMなら、どう撮れば商品を美しく見せられるのか。どんなに機材が新しくなっても、やっぱり「写す」っていう行為の原点に立ってないといけないと思うんです。

そのためには、過去の作品とか照明とか色々勉強しないといけないし、自分の引き出しも増やさないといけない。あと、映画を是非やって欲しいです。CMだけやっている助手さんは映画はなかなか難しく、映画をやっている方はCMでも使えます。映画は難しいことを要求されますが、1本やるとCMを100本やるくらいの経験が培われます。相当プラスになります。

(2012年10月にインタビュー致しました)